



助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
| 独立行政法人日本芸術文化振興会

第五十八回

花景会



令和8年5月31日（日）

二十五世観世左近記念
観世能楽堂



番組

お話し 武田 宗典

13:30

仲光

武田 友志
武田 智繼
武田 應秀
武田 文志

能

宝生 常三

山本 則重

原岡 一之
鵜澤 洋太郎

松田

弘之

武田 宗和
坂井 音雅
武田 尚浩

武田 章志
武田 祥照
林本 大
佐川 勝貴

岡根 久丸
武田 志房
武田 宗典

15:00頃

休憩二十分

仕舞

土車 知章 玉段 歌占

仕舞

松木 千俊
林本 大
関根 祥丸
川口 晃平

武田 章志
坂井 音隆
坂井 貴信
坂井 音晴

二人袴

山本東次郎

狂言

山本泰太郎
若松 隆
山本凜太郎

16:00頃

百万

舞囃子

坂井 音雅

柿原 弘和
鵜澤 洋太郎

梶宅

聡

松木 崇俊
武田 崇史

清水 義也
松木 千俊
下平 克宏

義也
千俊
克宏

隅田川

独吟

武田 志房

仕舞

弱法師 善知鳥

山階彌右衛門

休憩二十分

能

武田 祥照
松木 千俊
岡木 久俊
清水 義也

義也
千俊
久俊
義也

16:50頃

天鼓

武田 友志
福王 和幸

山本 則秀

下平 克宏
山階彌右衛門

柿原 弘和
大倉 伶士郎

林市 雄一郎

竹市 学

武田 崇史
田口 亮二
川口 晃平
坂井 音晴

坂井 音隆
角 幸二郎
觀世 三郎
坂口 貴信

音隆
幸二郎
三郎
貴信

附祝言

終了予定十八時十分





能 仲光 (なかつく)

解説

現代とはまったく異なる、武家の価値観、武士道の悲劇を描いた作品です。主君への忠誠と我が子への愛情の間で葛藤する仲光の心情が胸に迫ります。忠義は現代では理解しにくい信条かもしれませぬ。しかし、大切にしたい二つのものが対立する状態になった時、板挟みとなって苦しんだことは誰にもあるのではないのでしょうか。その究極の状態が、この仲光の置かれた状況です。

仲光の心の動きは、所作でも表されますが、謡の強弱や緩急、間(ま)といった繊細な能の技によって表現されます。(仲光)に登場する役は皆、能面をつけない直面(ひためん)で演じます。能では、能面をつけない時も顔に表情を作ることはず、謡や所作の工夫を通して心情を伝えていきます。(仲光)のような人間ドラマは、そこが見どころでもあります。

そして仲光だけでなく、ツレの満仲も難しい役どころでしょう。現代の視点では非情な父、主君のようにも思えますが、武家という立場にまっすぐな人物ともいえるかもしれませぬ。観世流では(仲光)の曲名ですが、他流では(満仲)と呼ばれています。さらに美女と幸寿の存在も忘れることはできません。父や美女の心情をくみ取る幸寿と美女の覚悟、それを目にして苦しむ仲光の姿に涙を誘われます。

実は、能の(仲光)には元になる素材があると考えられています。中世に流行した語り物の一つ、幸若舞曲(こうわかぶきょく)には『満仲』という作品があります。『満仲』では、幸寿の身代わりは明かされなまま、匿われていた美女は恵心の弟子となって円覚と名乗り、後に故郷へ戻ると祈禱によって盲目の母の眼を治します。ここで円覚は自らが美女であること、幸寿の身代わり、仲光の忠義を明かします。満仲は、仲光に領地の半分を与え、寺を建立して幸寿の菩提を弔うという、能とは異なる展開になっています。能は、宗教色の強い『満仲』から、仲光の苦悩に焦点を当てて場面を切り出し、舞を加えて再構成しているといえます。

舞台展開

- ①多田満仲(ただのまんじゅう)(ツレ)が登場し、床几に腰を掛けます。本舞台は満仲の御所です。
- ②多田満仲に仕える藤原仲光(シテ)が現れます。満仲の息子、美女御前(びじよぜん)は中山寺に預けられていましたが、学問に身を入れず、武芸に明け暮れています。息子は

自分は手拍子で囃したものと思い、悲しみを秘めて舞います。やがて恵心は、比叡山に美女を連れて帰っていきます。仲光は学問に邁進するように美女を諭し、幸寿がお供をしていたらと思いつつ、うちしおれて美女を見送るのでした。



仕舞 土車 (つちぐるま)

解説

仕舞は、能一曲の見どころを地謡のみに合わせて舞う上演形態です。

能(土車)は、妻の没後に出家し信濃善光寺にいた父と、その行方を探し求めていた息子と傳(めのと)の小次郎の再会を描いた能です。小次郎は主君の子を土車に乗せて諸国を廻り、善光寺に到着。如来堂へ立ち入ろうとすると、堂守りの男に芸を要求されます。仕舞は、芸として披露される小次郎の謡舞です。善光寺の阿弥陀仏を称え、父、主君との再会を祈ります。



仕舞 知章 (ともあきら)

解説

能(知章)は、『平家物語』を元にした、平家の若武者知章の霊が現れる修羅能。知章の父は、武勇で知られた平知盛(とももり)です。能(船弁慶)(ふなべんけい)の後シテでもあります。『平家物語』には親子の壮絶な運命が語られています。一ノ谷合戦で知盛と知章、家臣は落ち延びていたところを敵に追いつかれます。敵が知盛に組みつこうとした時、知章が割って入ります。結果、知章と家臣は討たれ、知盛は逃げるこができたのでした。知盛は息子を見捨ててしまったこととその死を深く嘆きます。仕舞では、知章の霊が奮戦の末に討たれた有様を再現し、さらなる供養を願う結末が舞われます。



仕舞 玉之段 (たまのたん)

解説

「玉之段」は能(海士)(あま)の見どころの一つ。藤原房前(ふさざき)の大臣は、七き母の供養をおこなうため讃岐志度(しど)の浦を訪れます。そこへ現れた海士が、龍神に奪われた宝珠の物語を語ります。その昔、珠を取り戻そうと浦に来た藤原淡海(たんか

の様子を知った満仲は、仲光に美女を連れて来るように命じていました。仲光は、美女(子方)と自分の息子、幸寿(こうじゅ) (子方)を連れて満仲の御所へ参ります。

③満仲が美女の前に経を置いて、学問の進度を確かめるために経を読むよう命じます。しかし美女は手習い(和歌や音楽)もできず、経も読めないと答え泣くばかりでした。怒った満仲は、太刀に手を掛けます。その瞬間、仲光は走り出て満仲の袖を押さえ、この場から美女を立ち去らせます。

④仲光の進言に対し、満仲は太刀を渡しますが、美女を討って来いと命じます。

⑤満仲が座敷を出ると、一人になった仲光は美女を逃すことにします。

⑥舞台は御所の一室。父の言葉を聞いていた美女は、自分の首を父に差し出すように仲光に言いますが、仲光はひとまず美女を落ち延びさせると答えます。しかし、そこへ満仲の催促の使いが来て、美女と仲光は嘆き涙を流すのでした(実際の舞台に満仲の使いの役は登場せず、仲光の謡と所作で表現されます)。

⑦仲光は「自分が同じ年頃であったならば、身代わりに命を捧げるのに」と嘆きますが、それを聞いた幸寿は自らが美女の身代わりになると申し出ます。仲光は我が子ながらその申し出に感服します。程なく、太刀を持って幸寿の後ろに立ち寄ると、美女は仲光の袂にすがり、自分も自害をしようと泣いて仲光を制します。二人の子は合掌をし、仲光は主君と我が子の間で苦悶します。美女は自分の犠牲になろうとする幸寿を思って悲しみ、幸寿は武家の名を残すことを述べます。仲光は主君を手にかけることはできないと思いに至り、ついに幸寿を斬るのです。

⑧従者が仲光に同情の声をかけます。仲光は従者に美女の供をして立ち退くように言い、その跡を見送ります。従者は美女に声を掛けつつ一緒に去って行きます。

⑨再び満仲の座敷。仲光は美女を討つたと報告します。すると満仲は幸寿を自分の跡継ぎにするので、呼んでくるように命じます。仲光は、幸寿が美女との別れを悲しみ出家をしたと答え、自分も出家を願い出ます。しかし、それを満仲は留めます。

⑩事件からしばらく時が過ぎ、比叡山の恵心僧都(えしんそうず)(ワキ)が美女を連れて、満仲の御所へやって来ます。恵心は仲光をいたわり、まずは自分が来たことを伝えるように言います。

⑪満仲と対面した恵心は、仲光が幸寿を身代わりに斬り、美女を助けたことを明かし、美女を座敷に連れ出します。満仲は、自害をしなかった美女を責めますが、恵心は幸寿の供養と思って美女を助けるようにと涙を流して頼みます。満仲の心はやわらぎ、申し出を受け入れるのでした。

⑫喜びの酒宴となり、満仲は仲光に舞を所望します。

⑬恵心にも勧められた仲光は舞を舞います(「男舞(おとこまい)」)。

⑭仲光は幸寿が生きていれば、美女と相舞(あいまい)(一緒に連れだつて舞うこと)をさせ、

い)は、海士と契り息子をもうけます。淡海は、海士が珠を龍宮から奪取したならば、子を跡継ぎにすると約束。そこで海士は海底へ飛び入ったのでした。「玉之段」は、ここから始まります。珠を盗み取る様が生き生きと描かれ、写実的な所作で表現されます。実はこの海士こそ房前の母でした。命と引き換えに珠を取り戻した海士。我が子への思いの強さが心根にある仕舞です。



仕舞 歌占 (うたうら)

解説

歌占は、和歌を記した短冊を弓の弦に付け、客の引き当てた短冊の歌の内容で占います。伊勢の神職渡会の何某は頓死し、三日後に蘇生しますが、白髪となり歌占をして諸国を廻っていました。そして加賀白山の麓、渡会の何某のもとを、少年が歌占のために訪れます。歌占の結果、実は二人は親子であったことがわかり、共に故郷へ帰って行きます。仕舞では、神憑りの状態となった渡会の何某が狂乱の様子を見せる結末場面が舞われます。



狂言 二人袴 (ふたりばかま)

解説

子を思う親の心を狂言らしく描いた作品です。裂けてしまった袴をどうするのか、またどうやって舅の目をごまかして盃を交わしたり、舞ったりするのか、親と智にとっては大ピンチの状況です。ありえないような展開に笑いを誘われます。

「智入り」とは智養子に入ることではなく、結婚の後に夫が初めて妻の実家に挨拶に行く中世の風習です。(二人袴)の智は、智入り狂言の中でも特に親離れの出来ていない無邪気な若者として描かれます。父はそんな息子が心配でたまらず、小言を言いつつもあれこれ世話を焼いています。いつの時代も変わらない親子の関係なのかもしれません。

長袴は普段着に用いる袴ではなく、儀式などあらたまった場で着用される礼服です。智入りという大事な儀礼の場なので、長袴がふさわしいと言えます。

舞台展開

- ①舅(アド)が太郎冠者(アド)を呼び出し、これから智が挨拶にやって来るので、掃除をし、到着したら知らせるように命じます。

② 聾の父親（アド）が、聾入りをする息子を呼び出します。
③ 聾（シテ）が現れます。聾は恥ずかしがって聾入りの挨拶を嫌がります。何でも欲しいものを与えるというので、聾は人形やえのころ（仔犬）が欲しいと答え、さらには一緒に来てほしいと頼みます。親は門前までついて行くことになり、二人は舅の家に向かいます。

④ 親は太郎冠者に案内を乞い、子が長袴を着けるのを手伝ってやりませう。

⑤ なんとか袴を着けた聾は、太郎冠者の取次で座敷に通されて舅に挨拶をします。太郎冠者が親も参っていると伝えると、舅は「親も呼ぶように」と命じます。聾はそれを制して、自身で門前へ呼びに行きます。

⑥ 実は、持参した袴は一枚だけでした。聾は袴を脱ぎ、今度は親が袴を着けます。

⑦ 親が座敷に赴き、舅と挨拶を交わします。舅は聾がいないので、太郎冠者に呼んで来るように言います。慌てて親は門前に戻ります。

⑧ 親は再び聾に袴を着けてやり、聾は座敷に向かいます。

⑨ 今度は親の姿が見えません。聾が、親はもう帰ったと言いますが、舅は太郎冠者に呼び戻すように命じ、聾は急ぎ門前に戻ります。

⑩ 聾は慌てて袴を脱ぎますが、太郎冠者が、二人揃って座敷に来るように舅の言葉で伝えます。親と聾が袴を持って言い合いうちに袴が二つに避けてしまいました。困った二人は、裂けた半分の袴をそれぞれに着けて座敷に出ることにします。

⑪ なんとか二人は舅と盃事をおこないます。

⑫ 舅は聾に舞を所望します。最初は座ったままで舞ってやり過ぎそうとしますが、立って舞うように求められて……。

舞囃子 百万

解説

舞囃子は、一曲の見どころを囃子と謡に合わせて舞う上演形態です。

京都嵯峨野の清涼寺（せいりょうじ）釈迦堂の大念仏に女物狂（おんなものぐるい）の百万が現れ、念仏の音頭をとって車を引きます。百万は行方不明になった我が子を探し求めていたのです。舞囃子は、百万の曲舞（くせまい）の奉納場面にあたります（「サシ・クセ」）。我が子への深い愛情、奈良から都までの道中、清涼寺の本尊釈迦如来の由来とありがたさを謡い舞い、親子再会を願います。能の結末では、めでたく再会を果たし親子で奈良へと帰って行きます。

能の百万のモデルは、南北朝時代の実在した曲舞の名手、百万です。この百万の流れを

仕舞 善知鳥

解説

能（善知鳥）は、殺生への興奮とその懺悔や死後の苦しみを親子の情愛とからめて描いた執心物の作品です。外の浜を訪れた僧の前に、狐師の霊が現れます。霊は我が子に近寄ろうとしますが、殺生の罪ゆえに近づけません。生前に狐師は、親鳥が「善知鳥」と鳴いて子と呼ぶと、子が「やすかた」と鳴くという善知鳥の習性を利用して狐をしていました。やがて辺りには地獄の世界が出現します。仕舞では狐師の霊が地獄で苦しみを受ける様を舞います。現世で善知鳥と見えたのも、地獄では怪鳥となって霊を追いついてます。絶えることのない苦しみを訴えて、霊は消え失せたのでした。

能 天鼓 弄鼓之楽

解説

能の前半では、権力者によって子を殺された親の悲しみが描かれます。父は怒りを帝に向けることもできず、自分の悲しみが煩惱ゆえである苦悩します。さらに我が子の形見の鼓を打てという非情な命令に心を乱すのです。父が鼓を打つと美しい音が響きました。それは父にとって救いとなったのでしょうか。能では、その後の王伯について何も語りません。そこには安易な解釈や想像を許さない作者の深い思いが感じられます。

悲哀に満ちた前半とは一転して、後半は開放感ある雰囲気に変わります。天鼓の霊の舞が見どころの一つです。本日は「弄鼓之楽」の小書（こがき）（特別演出）での上演。常の上演では王伯の登場場面に長い謡がありますが省略され、天鼓の舞う「楽」に様々な工夫がなされます。いつもは演奏に加わらない太鼓が囃子に入り、笛の調子が盤渉調（常より高い調子）になります。天鼓は橋掛りから鼓を見込んだり、撥て鼓を打ったりするなどの動きをします。天鼓が水辺で鼓に戯れる様子に焦点を当てた演出です。のびやかな囃子の音色に合わせ、次第に高揚感が増していく舞をお楽しみください。

そもそも「天鼓」とは、天から降り下る雷・星・隕石などのことです。仏教では、打たなくても自然に音を鳴らす天上界の楽器であるとも考えられていました。天鼓の不思議な出生や、無邪気に舞い戯れる様子は、どこか人間離れた神秘的な雰囲気を感じさせます。

「天鼓」は牽牛星（彦星）の別名でもあります。それゆえ結末の謡には、七夕を踏まえた「糸竹・鳥鵲（うじやく）の橋・二星（じせい）」（管絃・カササギの橋・織姫と彦星）といった言葉が出てきます。管絃の技の上達を祈る乞巧奠（きつこうてん）という七夕の行事と、

くむ女曲舞に世阿弥の父、観阿弥は曲舞を学び、それを能に取り入れたことが知られています。有名な曲舞をモデルにした作品らしさを出すために、「百万」ではシテの謡が二回入る長いクセが舞われます。曲舞が劇中舞として取り込まれていますが、ここには子を思う母の強い願いが込められています。

独吟 隅田川

解説

能（隅田川）は、物狂能で唯一悲劇的な結末を迎える作品です。我が子を人商人にかどわかされた母が物狂となり、子を探して都から隅田川の渡し場に行って来ます。対岸に渡る舟の上で、母は一人の少年が亡くなった経緯を船頭から聞きます。本日の独吟では、その少年梅若丸の悲話が謡われます。能では、この謡はワキの担当であり、ワキ方の大切な「語」となっています。シテ方の独吟になると、ワキ方の「語」に遠慮をすること、この謡は詞（セリフ）だけで謡の節（ふし）がないことから、初めに能（生田敦盛）の短い謡が謡われます。これについては、独吟を披露される武田志房師より「観世流御宗家から観世流の口伝心得であると承りました」とお教えいただきました。特別な独吟をじっくりとお楽しみください。

仕舞 弱法師

解説

讒言によって父に追放された俊徳丸（しゅんとくまる）は、盲目で足元がおぼつかない弱法師と呼ばれていました。二月時正（じしやう）の日（彼岸の中日）、追放を後悔していた父は天王寺（四天王寺）で施しをおこないます。そこへ弱法師が現れ、ついには親子再会を果たします。仕舞では、西に沈む夕日の中で極楽浄土を心に想い祈る日想観（じつそうかん）の時に、弱法師が西門の石の鳥居から日没を拝む場面が舞われます。難波の浦を心の眼で眺め、すべての景色は心の中にあると思いつります。さらに方々の景色を見渡しますが、大勢の人に突き当たり、転げ伏してしまいました。

天鼓のための管絃講。天の河と天鼓の沈められた呂水。七夕と能の設定が組み合わさることとて、天鼓が打つ鼓の音が鼓から溢れ出し、波となって夜空いっぱいになり続けるような光景が浮かんでくるようです。

舞台展開

① 後見が羯鼓台（かっこだい）の作り物（舞台装置）を運び出します。

② 古代中国後漢の帝に仕える臣下（ワキ）が登場します。王伯（おうはく）と王母（おうぼ）の夫婦の子は、天から鼓が降り下る夢を王母が見て生まれたので天鼓と名付けられました。その後、本物の鼓が降り、天鼓がその鼓を打つと素晴らしい音色が響きました。それを知った帝が鼓を差し出すよう命じたので、天鼓は逃亡。しかし捕らえられ呂水（ろすい）の江に沈められてしまいました。宮中に召された鼓は誰が打っても音が鳴りません。そこで帝は王伯を呼び、鼓を打たせることにします。臣下は、王伯の家へ赴きます。

③ 季節は秋。臣下が王伯の家に到着。臣下は王伯（前シテ）を呼び出し、帝の命令を伝えます。王伯は自分が鼓を打つても鳴るはずはないと答え、罪人の親として死を覚悟して宮中に向かいます。橋掛りが宮中までの道のりを表します。

④ 舞台は宮中。王伯は鼓を打つようながされますが、鼓を前に悲しみ、親心ゆえに断ち切れない愛情の苦しみを嘆きます。

⑤ 臣下に命じられた王伯が、心を決めて鼓を打つと美しい音が響き渡り、王伯は泣き崩れるのでした。

⑥ 天鼓の弔いを管絃講（かげんこう）（音楽を用いた供養）でおこない、王伯を自宅に送るようという帝の命令を臣下が述べます。

⑦ 臣下に命じられた従者（アイ）が、王伯をいたわりながら家へ送り届け、管絃講の役者に集まるよう触れます。

⑧ 舞台は呂水。帝や臣下たちが呂水の堤にやって来ます。夜、管絃の響きの中、秋風が吹き、とうとうと水が流れ、波が打ち寄せています。

⑨ 「出端（ては）」の囃子に合わせて天鼓の霊（後シテ）が現れ、供養に感謝をします。

⑩ 天鼓は愛用の鼓を打ち、舞楽を舞い始めました（「盤渉楽」（ばんしきやく））。

⑪ 管絃の音色に、呂水の波音と鼓の音が重なり響きます。天鼓は川水に遊び戯れ、さらに鼓を打ち鳴らすと夜明けと共に消えてしまいました。

〈次回予告〉

—第59回 花影会—

令和9年5月30日(日)13時開演

能「草子洗小町」武田文志

ツレ/紀貫之 坂口貴信/子方 武田智継/ワキ 福王和幸/地頭 武田志房

笛 齊藤敦/小鼓 田邊恭資/大鼓 柿原孝則

狂言「佐渡狐」野村萬

独吟「玉取」武田志房

仕舞 観世清和/観世三郎太 他

能「鞍馬天狗」武田友志

子方 武田應秀/ワキ 野口能弘/地頭 岡久広

笛 杉信太郎/小鼓 観世新九郎/大鼓 大倉慶乃助/太鼓 金春惣右衛門



公益財団法人

武田太加志記念能楽振興財団

Takashi Takeda memorial nohgaku foundation

ttmnf

表紙写真「仲光」「天鼓」いづれも撮影 前島吉裕